

断崖に立つ女

喜多圭介

断崖に立つ女

第一章	弓ヶ浜	5
第二章	憂愁	32
第三章	越前武生	42
第四章	白い傷	56
第五章	越前岬	77
第六章	湖の白雁	91
第七章	渡月橋	111
第八章	小面	122
第九章	般若	134
第十章	夜の波濤	141
第十一章	中宮寺	158
第十二章	貴船	169
第十三章	神護寺	186
第十四章	京都タワ	207
第十五章	隠岐	234

- ◎編集 佐田 満
- ◎校閲 佐田 満
- ◎装丁 Yuki
- ◎画像処理 デザインオフィスはな
- ◎カバー撮影 秦野秀明
- ◎コピー 宇田川森和

断崖に立つ女

第一章 弓ヶ浜

ほろびほろびほろび切れざる情念の草生そうふに立ちて人は語るを

馬場あき子

瑤子ようこは南伊豆の弓ヶ浜に、自宅と工房と店を繋いだ居を構えている。

六月の夕暮れ前、店先に背広姿の男が立っていた。ショーウインドーには瑤子の彫った仏像などが、観光客からも鑑賞できるように展示してあった。男は暫くそれらの仏像を眺めていたが、意を決した顔で店内に入った。

奥の腰掛けに座っていた瑤子は、ファッション雑誌を暇つぶしに眺めていた視線を上げた。男の

容貌に、不意に得体の知れない胸騒ぎを覚えた。何処かで逢ったことがあるのだろうか、と記憶を探った。

男はおもむろに瑤子に近付いてきた。

仏像一体と娘の姿を彫って貰えないか、と物静かに抑えた口調で話しかけると、背広の内ポケットから茶色の名刺入れを取り出し、瑤子に淡いクリーム色の名刺を手渡した。

K印刷株式会社 社長 本宮桂もとみや かつら。

会社の住所は京都市内だった。

「仏像一体とお嬢様のお姿を、ですか」

依頼の物言いに沈思した感情が籠められていたので、瑤子は訝しげな眼差しになった。瑤子は普段から相手に何かを感じると、凜とした黒い瞳で、相手の魂にまで突き刺さる強い視線を投げがちであった。いまもそういう眼になっていると、瑤子は感じた。

端正な顔立ち、黒髪であったが鬢びんに、ほんのわずか白いものが混じっていた。

「そうです」

「京都からわざわざ私の店に」

瑤子は少し用心した口調で訊ねた。

「昨年六月に一度こちらに来ました。その折りに、店先に出ていた弥勒菩薩に惹き付けられたのですが、眺めるだけに」

「眺めて戴けるだけでも嬉しいですわ」

「もうあれはありませんね」

「昨年秋に東京のご夫婦がお買いあげに」

「そうでしたか……」

本宮はそう言うと、店内の棚に並べてある土産用の小物を珍しそうに眺めた。

瑤子は大黒、七福神のたぐいは彫らなかつたが、気に入った仏像は彫つた。キリストは彫つたことはなかつたが、マリア像も彫れば、犬、猫、牛、馬の体の一部分、顔、手、足も彫つて、棚に飾つた。

土産用といつても伊豆半島ゆかりの物を彫っているのではなかつた。瑤子は何かに拘束されて物事をするのが駄目だつた。自由に、自分という人間の器うわに合つたことを選び、愉しみながら生きていくことができれば、いまはそれで満足であつた。

温泉と観光に訪れた客が、店内をのんびりと眺め、小物を買つてくれたり、ときには十数万円の定価を貼つた品を宅急便で送つてくれないかという、嬉しい客もあつた。銀座の百貨店とも契約していたので、月に一、二点は十数万円以上の彫刻が売れ、贅沢さえしなければ、娘との二人だけの暮らし向きは成り立つていた。

「よろしければ奥に応接室があります。そちらでご用件を伺わせていただければ……」

「それじゃ遠慮なく」

瑤子の中仕切りの短い暖簾のれんを手でかき分けると、先に立つて応接室に案内しながら、今日はこちらでお泊まりですか、と訊ねた。

「ええ、昨年泊まったホテルに」

「お仕事で？」

「横浜の同業者との打ち合わせを済ませ、踊り子号でこちらへ。この件があったので」

「わざわざここまでお越しを？」

「海を眺めがてら」

冷房の効いた応接室のソファに腰を下ろした本宮は、頬に儂はかなげな笑みを浮かべた。生うしな気を喪なつた少女の白い顔のようでもあった。

遠い日に何処かで出逢ったのではないか、というこだわりが、瑤子の胸から消えなかつた。

「あのう、コーヒーか紅茶を？」

「紅茶を」

「ミルクティー？」瑤子は自分の好みを口にした。

「そうしてもらえれば」

瑤子は素早く奥に通じるドアを開け、「真美まみ、ミルクティー二つ淹いれて頂戴！」と声をかけた。

奥の方から、はい、と弾はじんだ声が返ってきた。

「お嬢さん？」

「一人娘で、先程学校から帰宅しました」と笑みを浮かべた。

「先程話されたご夫婦はいい買い物されましたね。あの弥勒菩薩は見るからにひとを包み込む温もりがあった。見つめているだけで傷心を癒される優しさがあった」

瑤子は本宮の贅辞に胸を温めたが、複雑でもあった。本宮に言うべきかどうかを迷っているうちに、自然と唇が開いてしまった。

「喜んでいいのか……難しいことがありましたので」

「難しいこと？」

「お買いになったご夫婦、つい最近、ご主人のお姉様からお手紙を頂戴しました。お買いあげになった年の秋、富士山麓の青木ヶ原樹海で心中されたんです」

「心中……」

「あの辺りは溶岩が重なり合った洞穴が、いくつもあるそうです。その中でお薬を飲まれて亡くなっておられたようです」

本宮は瑤子の話に眼を瞠みはった。

「……そんなことが……」

「私も胸のほとぼりがまだ納まっています」

「覚悟の心中……」本宮は嘆息をつくように呟いた。

「時期としては紅葉で綺麗だったとは思いますが」

生真面目な顔で眉を顰ひそめた本宮の表情に、瑤子はその表情が醸し出す雰囲気、誰かに似ているのだが……、と先程から思案していたが、なかなか頭に浮かんでこなかった。

「遺書はなかったのですが、警察でも事故死とは判断されなかったとか。現場に買って戴いた弥勒菩薩が、臙脂えんじの袱紗ふくさの上に安置してありました」

「そうでしたか……」

瑤子は本宮の顔から血の気が退くのを認めた。本宮は背広のポケットから真っ白なハンカチを取り出すと、額を拭った。

「わけありだったのでしょうか？」

「お姉様のお手紙では、奥さんが入院されることになっていました。子宮癌が見付かり、その摘出手術のために。心中される二日前にお姉さんのお宅を訪れたときは、思いわずらっている風なところは全然なく、明るく談笑され、お酒をお呑みになって一泊されたそうです」

「今生の別れ」

「そうなんでしょうね。鴛鴦夫婦だったようです」

「覚悟ができていると暗い表情にはならないかも。心に……」

と言ってから、本宮はあとの言葉を呑んでしまった。

「心に……何がです？」瑤子にはじり寄る気配を示した。

「覚悟しているひとは、心に生と死の境界がなくなるのじゃないかな」

「境界がなくなる……」

近藤もあのとき、生と死の境界がなくなっていたのだろうか、と瑤子は、遠いところを見詰める眼差しになった。

「あなたに彫られた弥勒菩薩に迎えられる覚悟の心中。きっと安堵の旅立ちだったでしょ」

「そうでしょうか？」

瑤子は本宮の顔を覗きこんだ。

「現世の未練をすべて消していても、死出の旅に向かう人たちには、迎え入れられる世界が必要じゃないかな。臨死体験の本などを讀むと、トンネルの向こう側に明るい花園が展けていたが、そこに行き着く前に呼び戻されたと書いてありますね」

「そうですね、きつとそうなんですよ。私なりに精魂を籠めて彫り上げた仏様ですが、まだまだ未熟ですから、気になって気になって。ご夫婦の小さなお姿を彫り、仏壇に納め、朝夕拝んでおりますの」

本宮は意外といった顔付きで、瑤子の顔を見つめた。

「ご奇特なことですね」

「お子様はなかったそうですね」

「そのことも心中に踏み切りやすい原因だったかも」

「だと思いません」

「それにしても近頃は高齢者の心中や若いひとの集団自殺多いですな」

「どうして次々と自殺するのかわかる？」

「生活体験が画一的で、安全なエスカレーターで上に昇っていく感じだから……生きていくことが軽く思えるのでしょ」本宮は物静かに言った。

そのとき、瑤子は胸裡で、あっ！ あのひとに……と呟いた。

錯覚とも思えるほどの淡い類似だったが、瑤子は近藤昌克まさかつの面影を見た。

容貌が似ているのではなかった。だがちよつとした本宮の表情の変化、虚ろな視線の揺らめきに、日頃忘却していた近藤の面影を垣間見た。

瑤子の今の姓は関山だが、もし近藤があのような死を遂げなければ、近藤瑤子になっていた。

「……それでは用件のほうを」

本宮は本題に話を戻した。

「あら嫌だ。違うことばかり話して」

「娘の写真を三枚持つてきました。麻子です。彫る参考にして貰えれば」

本宮は背広の胸ポケットから封筒を取り出し、同封していた写真をテーブルの上にそつと置いた。

「高三のときの演奏会のものです」

「楽器がチェロ。珍しいですね」

瑤子は胸の動悸を抑えて写真を見つめた。

「小学四、五年頃から気に入りました……先ほどの娘さんは高校生？」

「いま高三ですの」

「受験前かな」

「はい。淑やかなお顔」

瑤子は三枚の写真を手にとって眺めていた。

「一人っ子でした」

そう言った本宮の口調に引つ掛かりを覚え、瑤子は写真から顔を上げると、本宮の表情を読もうとした。瑤子の気配に何かを感じたのか、本宮は「大学一年の春に事故死を」と付け足した。

「まあ……」瑤子は声を上げ、絶句した。

「あれはフリージア」

本宮はさりげない風をとり繕つくろったように、日当たりのよい窓辺に飾つてある鉢に眼を留めた。白の花弁はなびらが淡く開いていた。

「よくご存知ですね」

瑤子はフリージアに視線をやっているた本宮を、斜め横から眺め、やはりそうだ、近藤と同じ眼差しだと確信した。

そこへ真美が、失礼しまゝす、と今時の口調で入ってきた。

ちらつと本宮に視線を投げてから、盆に載せてある二つのカップをテーブルに置いた。

本宮は真美の物腰を眺めていた。

「今日は帰るのが早かったわね」

「土曜日」真美は応えた。

それから真美は小さな声でだれにもなく、ごゆっくり、と言って立ち去った。

「聡明なお嬢さんだ」

真美の顔を眺めたとき、本宮は、真美の潤んだ瞳に、以前こういう眼を見た筈はずだが、と訝しいものを感じたが、思い出せなかった。

「勉強はまるでしないんですよ」瑤子は笑みを浮かべた。

本宮は気を取り直したように一息つくくと、「麻子は花が好きで、初夏の頃はフリージアを自室に飾ってました。それにフリージアや杜若かきつばた、夏水仙といった白、紫、ピンク系の花を」

「……」

「ほんとに花の好きな娘だった」

「具合の悪い物をお目にかけてしまい……」

「いや逆です。娘の好んでいた花が咲いていたら、嬉しいものです」

「悲しみが癒えませんか」

「ありがとうございます。ところでどうでしょうか、三枚の写真から彫って貰えるでしょうか、サイズはこの手に載せられるほどの」

本宮は右の掌を開いた。掌丘に厚みがあり、指先から掌丘までが桃色に染まっていた。

温かみのある優しい手だと思った途端、瑤子は日頃の暮らしの中で、遠くに忘れ去っていたときめきを覚えた。

「仏像は一尺ほどの丈のものを。奈良の中宮寺の半跏思惟像はんかしゆいを模写したようなものを」

「中宮寺にはよく？」

「何度も」

本宮は穏やかな笑みを浮かべた。

「高校生の頃から弥勒菩薩に親しまれるのは珍しい」

「失恋を癒すために」

「そうなんですか！」瑤子は大仰な声を上げた。

「中学生の頃から人生論や哲学書を読み始めたので、背伸びしてました。三十までは老け顔に見られましたが、それから歳をとらない顔になった」

本宮は晴れやかな笑顔を、瑤子に返した。

それにしても本宮はとんでもない難題を持ち出したものだ。

——中宮寺のを模写したようなですって！

あの微笑がエジプトのスフィンクス、レオナルド・ダ・ヴィンチのモナリザと並ぶ、へ世界の三つの微笑と呼ばれていることをご存じないのかしら。

瑤子は本宮の要求を胸の裡で呻いた。

「彫って貰うとなると、あなたのほうのご都合もあるでしょ。予算と納期の件を。予算は二体で百万。納期は年内十一月末。いまからでは半年もないので、あなたの日程に無理が重なるかと思いますが、どうしても秋には欲しい。手付けとして三十万用意してきました」

「納期もそうですが、私にはとても難しい仕事」

「あなたなら彫れる筈」

彫れる筈と断言するのは、私の何処を見て言っているのだろう、と瑤子は呆れた。

「昨年の仏像の笑み、それに先程も店先の仏像を拝見させて貰いました。彫れますよ」
なんとという無知、と瑤子は腹立たしくなった。

本宮は瑤子の腹立ちに気付かないのか、我関せずといった表情で、背広の内ポケットから白い封筒を取り出し、テーブルに載せた。現金が同封されているようだった。

「もつと先で結構ですのに……」

「そういうわけには」

穏やかな口調であったが、本宮の瑤子を見る視線は掌の色とは異なり、冷たく据わっていた。何が何でも瑤子に引き受けて貰いたい熱意が顔に滲み出ていた。

二体で百万は多すぎた。瑤子は自分の現在の技量では、仏像一体で三十万以下が相場だと考えている。彫りの精巧と塗りが入る入らないで、五万ほどの差額はあるが、それでも三十五万円が上限だった。チェロを弾く少女像であれば、十五万前後だ。

問題は納期であった。

細工物によるが、片手に載る小物であれば一週間もあれば彫れる。しかし一尺の仏像は二カ月以上かかる。亡くなった少女のことを思うと、ヘチェロを弾く少女は、とても一週間、二週間で彫れるものでない。二カ月はほしい。その上に謎の微笑を浮かべた菩薩像、考えただけでも頭が痛くなる。菩薩像に二、三カ月かかる。

これまでも律儀な仕事をしてきた瑤子は、眉を顰め、下唇を強く噛んだ。

「あなたなら彫れます」

本宮は瑤子の顔色を窺い、励ました。

「ご免なさい。変な顔していたでしょ。癖なんです」

「挑戦してみてください」

——ああー、このひとは何もわかっていない、と瑤子は腹立ちを通り越して嘆いた。

今日が六月十二日、ヘチエロを弾く少女ではあったが、本宮の気持ち想像すると、これも仏様。仏様となると表情に苦労する。神々しい気高さや慈しみのようなものを、うまく表すことができるか。納得いく仏様を期限までに彫ることが可能か、瑤子は思いあぐねた。

「お急ぎなんですね」

瑤子はこだわりを押し隠して、念を押した。

「ご無理は承知してますが、よろしく願います」

本宮は瑤子の胸中を冷淡に突き放した。

「わかりました。お引き受けさせていただきます」

瑤子が承諾すると、本宮は固く握りしめていた拳を開いた。そして眼差しを和ませた。

「ここまで来た甲斐がありました」ほっとした口調だった。

「腰を痛めたりすることがあります。そうなることも言われた納期では無理です」

瑤子は自棄気味だった。

「坐業ですから、そうでしょう」

「力仕事が重なりますので、仕事中の姿はとても人様に見ていただく恰好ではありませんわ」

本宮に抗議する思いを籠めた。

それをも本宮は意に介せずの顔で「長々とお邪魔した。それじゃ十月の中旬頃にお電話を差し

上げますが、急なご用の折りは名刺の電話番号にかけていただければ」と言った。

えっ！ もうお帰り。まだ手付けの領収書を切っていないのに！ 店内に来客はないし、もう少しゆっくりしても、と瑤子は口にしそうになったが、初対面の男性に失礼な振る舞いと羞恥しゆうちが頬にのぼった。が、未練がましく「ホテルのほうにお帰りですか？」と言ってしまった。

「レストランから弓ヶ浜の夜景でも眺めます。そうだと都合よろしければ一緒に夕食を……ああお店がありましたね」

本宮の顔に一瞬、落胆の翳かげりが走った。

瑤子は男の憂愁ゆうしゆうに触れた思いで、胸がぐくと熱くなった。

「この辺りは六月はお客さんが少ないところです。混むのは子供さんが夏休みの時期」

「それじゃご迷惑でなかったらどうですか？ お嬢さんとご一緒に。一人で食べてもうまくないの
で」

本宮の声は一度落胆したせいから、弱々しかった。お嬢さんとご一緒にという言葉に、瑤子の胸は微妙に揺れた。父親のいない真美は、普段はいつも私とだけ食事をしてきた。

「お邪魔では？」

瑤子は本宮の表情を探った。

一日中工房で木と対むかい合い、木と語り合っていれば、いまの瑤子はそれで幸せだった。大型冷蔵庫に三、四日分の食料の買い溜めがあると、この間ま、誰とも顔を合わせずに暮らしていることが、たびたびだった。苦にならなかつた。むしろ木彫りに関心のない人間との世間話は、苦手で

あつた。

ここ一カ月間、夜はほとんど工房に籠もつて彫りに没頭していた。最近誰とも会話らしい会話を愉しんでいないことを、ふと思ひ出した。まして男性とは言葉を交わしたことがない、と自分の身辺の無粋に呆れた。

「七時ということで、レストランには予約しておきます」

瑤子が自分と娘の暮らしを省かえりみていたら、本宮は瑤子の返事を待たずに結論を引き出してた。「それでは娘とレストランのほうに。先ほどのお金の領収書はそのときに」

「郵送でいいでしょ」

店先の車道を渡り反対側の歩道を右に進んでいく後ろ姿を、瑤子は茫然ぼうぜんとした心持ちで追つていたが、本宮が歩道の先端を左に折れて消えると、店内に引き返し、応接室のソファにどさつと腰を下ろした。

——も、と、み、や、か、つ、ら……。

居なくなつた男の名前を呟いた。すると本宮の無理難題を思ひ出し、なんであんな男との夕食を約束したのか、と自分自身に腹を立てた。向かいのソファに本宮の幻影が残つていた。幻だつたのか、と瑤子は本宮との応接を現実のことにように思えなかつた。

しかしすぐに本宮がなんだか面白い男に思えてきて、自然と笑みがこぼれた。

瑤子はテーブルに置かれた三枚の写真を、俯き加減の姿勢で手に取り、まじまじと一枚一枚眺めていた。

そこへ「お客さん、帰ったの？」と、真美が興味ありげな表情でドアを開けた。

「真美と同年の麻子ちゃん」

「綺麗な顔してる」

真美は写真の一枚を手にした。

「大学一年の春に事故死だった」

「事故死！ 車？」

「訊かなかった」

「お父さんでしょ？」

「そう」

「淋しいよね」

麻子の端正な面差しは本宮に似ていた。

瑤子は眼を上げて、フリージアの花弁を見つめた。

本宮が納期を秋にこだわった謎が解けなかった。麻子が事故死したのは春だ。おそらく四月のことだろう。それならば命日に間に合わせたいということでもない。書斎にでも飾るのであれば、秋でなくてもいいはずだ。どういうことなのだろうか、と思索しながら、白い壁に眼をやった。

能面が飾ってあった。瑤子が奨励賞を受賞したときの面だった。小面こおもてが瑤子を見つめていた。

——麻子さん、あなたはなぜ死んだの？、と問うてみた。

答えは返ってこなかった。私の周辺に死ぬひとが多すぎると、もう一度呟いた。すると胸に黒

い影が差した。瑤子はそれを慌あわてて払いのけた。

「そうそう本宮さん、いまの方だけど、本宮さんが真美を連れて夕食をご一緒につて」
「食事するの？」真美の瞳が強く光った。

*

この辺りは、夕刻の人通りはほとんど見られなくなる。観光客はホテルや旅館での夕食にくつろく時刻である。

右手に陽の沈みかけた弓ヶ浜の、湾曲を描いた内海に一日の終わりの気配が、潮騒をとまなつて満々と展がっていた。それを横目に感じながら車を走らせた。

真美を助手席に乗せ、本宮の宿泊しているホテルに到着した。

十階廊下の奥まったレストランまで、久し振りのワンピース姿にハンドバッグを提げて歩いていると、入口前の椅子に腰を下ろしていた本宮が、微笑を浮かべて立ち上がった。待っていてくれたのだ、と瑤子は本宮の心づかいに胸が熱くなった。

「気ぜわしいお誘いをしてしまつて」

言葉とは裏腹に、本宮の顔は嬉しさに輝いていた。

真美は腰の上をページュのスーツと同色の細いベルトで絞ったシンプルな姿で、瑤子の背後に微笑かに笑みを浮かべて立っていた。スーツのせいかな、応接室で一瞥いちべつしたときの女子高校生という

印象が、本宮の脳裏から消え、澆刺とした女性をそこに見た。

「車で五分ですから」瑤子は応えた。

本宮はレストランの中に入りながら、「勉強の邪魔をしたかな？」と真美に声をかけた。

「そんなことありません」

真美は健康な白い歯列を愛くるしい唇のあいだから覗かせ、恥ずかしげな表情を作った。

白のワイシャツにグレーのスーツの若いウエイターが、弓ヶ浜の夕暮れを眺望できる、窓際のテーブルに案内した。陽の沈んだばかりであつたが、まだ空の群雲は茜色の残光に染まり、一日の終わりを惜しむように拡がっていた。

テーブルの燭台に蠟燭がほんのりと灯っていた。

「去年来たときは海上に月が皓々と照ってました」浜を眺めて、本宮は言った。

「海を眺めるのが好きですか？」

「本当は海そのものではなく、岬の突端とか断崖が」

それを聞いて、瑤子は胸がどきつとした。

——岬の突端、断崖……。

瑤子は自分の胸裡を探るように呟いた。

「岬には人間を隔絶した佇まいがあります。しかしこの潮騒の響きもなかなかいい」

「潮騒の響きは私も好きです」

驚愕のシヨックにほんやりしかかっていた瑤子は、慌てて返答した。

「山に木を探しに行かれることは？」

「材料は長年の取引先から納入しています」

「^{ひのみき}檜？」

「ほとんど檜。ほかに桂、公孫樹、^{けやき}櫻など」

「桂というのは灰にすると香りのいい木のことでですか？」

「とくに匂いがよいともいえませんが。いまはほとんど檜ですが、能の古面には桐や桂が使われたことがあります。檜は狂いが少ないので、細工がしやすいのです。塗り物との相性も」

「版画は少しやったことがあります。版木を触ったり彫ったりしているあいだ、不思議と気持ちが安らぎますね」

「ええ、そういう気持ちは私にも」

深紅のドレスのウェイトレスが、ウェイターと一緒に前菜を運んできた。

「お飲物は何にしましょうか？」とウェイターが訊ねた。

「白ワインで？ 真美さんはジュース？」本宮は真美に訊いた。

真美は頷いた

「木彫りは力仕事でしょう」

「本宮さんと腕相撲をすると、私のほうが強いかも」

瑤子は悪戯な瞳を輝かした。

「引き受けて載いてほっとしました」本宮は笑みを浮かべた。

ワインとジュースが来ると、本宮は、こんなことに付き合わせてしまつて、と嬉しそうに言つてから、三人はグラスを合わせた。

伊豆半島はこの時期でも、伊東辺りは温泉客で賑わっているのかもしれないが、先に石廊崎灯台しかない弓ヶ浜まで脚を伸ばす観光客は少ない。レストランには二組の老夫婦が静かに対ひ合っているだけだった。

商談という口実はあつたが、地元の見知つた顔が見られないので、瑤子は内心ほつとした。娘と二人暮らしの女は、地元での男性との面会に気をつかう、と日頃から思つていた。

「ご事情がおありのようで緊張しておりますが、預かつたお写真を眺め、暫くイメージづくりをします」

「何かの本に書いてありましたが、材料の丸太とか角材、それを膝元に置いてじつと眺めていると、自分が彫ろうとしている像が、木の内部に在るのが視えると。彫るのではなく、彫らせて貰うのだと。彫り師は鑿や刀を使つて余分な物を取り除くに過ぎないと。あなたの場合も？」

「そこまでは達していませんが、型紙は使いません」

「型紙？」

「設計図のようなものです。彫ろうとする像を、真正面からと真横から見た構図を、彫る前に図面しておきます。能面ですと見本面がありますが、私の彫る仏像は写真を見るか博物館に行くかで。あとはイメージした通りに彫刻する」

「なるほど」

「能面を修行中には型紙を使用しましたが、彫刻をやり始めてからは、頭の中に描いています」

「能面を修行中とは面打ち？」

「よくご存知ですね」

「面打ちのことはよく知りませんが、京都ですから観世流かんぜりゅうの演能会には」

「またも瑤子の頭の中が灰色になり、真向かいに座っている本宮の姿が、一瞬揺れた。観世流、演能会……。本宮とは何者？」

——印刷会社の社長がどうして観世流、演能会なの？

髪が逆立つ気配で、頭が惑乱わくらんした。

店先で逢った瞬間の直感が当たっていた。本宮は、能の鑑賞が好きだった近藤と同様なムードを醸し出しているのだ。

「面打ちの修行を越前でしております」

「越前？」

本宮は興味深そうに瑤子を見つめた。

「ええ。この子が生まれたことと、私には面打ちは無理だと限界を強く感じ、それからは止めました」

「限界？」

「精神性の問題ですけど、同じ木彫りでも私はもっと自由な気持ちでの彫りを求めています。面を打ちたいと思ったときの動機に、腰が入っていなかった浅はかさもあります」

「そうでしたか。立ち入ったことをお訊ねした。応接室の壁に小面が掛かってましたね。」

「お目に留まりましたか？」

「面打ちよりはいまのお仕事のほうが合ってる？」

「気楽にやれるということではないのですが、気持ちに無理がかからずに没頭できます」

「能面と仏像彫刻では違う面があるでしょ」

「仏像は仏様の思いだけを考えて、無心に彫ってあればいいでしょ。だけど面打ちは室町から連綿と継承されてきた能の一部でしょ。私には荷が勝ちすぎます」

「一度能面を被ったことありますが、なんかね不気味な感じがした。表と裏がまるで違うでしょ。裏は荒々しい彫り痕と煤を混ぜた黒い彩色の死者の世界。そこに開けられた二つの眼から生者の世界、観客を見下す」

「表と裏のギャップ、確かに大きいです」

瑤子は自殺した近藤を思い出した。あのひとが般若面の裏から見ていたものは……。

「本宮さんは生者の世界と死者の世界と言われましたが、能面には哀しみの世界が介在しない。それが私を息苦しく……」

「哀しみの世界がね」

「裏は演者の息づかいと藝の執念と悟りのすべてが凝縮され、演能の最中にそれらが立ち籠もり、渦を巻いている。だけどこのことは一切表には現れない。表は幽玄ゆうげん、無表情。面によって喜怒哀楽の表情はありますが、裏の感情とは違います」

瑤子は真剣に喋った。こんな風に他人に向かつて熱を籠めて喋ったのは、何十年ぶりのことか。本宮にはそれを受容する何かを感じられた。

「哀しみが存在しない、なるほどね。哀しみの表現は演者の演技に委ねられているのでしょ。そこを見極めるのが、面打ち師にとっても演者にとっても難しいことかもな」

「演能会にはよくお出掛けに？」

「年に二、三度は」

「表と裏の相違を掴んでおられるのに驚きました」

「当て推量」本宮は笑っていた。

真美を放ったらかしにして喋っていると、本宮がオーダーしておいたイタリア料理のフルコースの皿が、二人の若いウェイトレスによって運ばれてきた。

「真美さんは退屈したかな。ゆっくりと食べましょう」

本宮は真美を気づかかって声をかけると、真美は大きな瞳で微笑んだ。湖水を湛えた乙女らしい澄んだ眼を眺め、本宮はやはり胸に何か引掛かっていた。

「本宮さん、麻子さん自動車事故？」いきなり真美が訊ねた。

瑤子はびっくりした。

「真美、失礼でしょ！」

「構いません。真美さんと近い年齢で死んだので気になるね。妻が運転していた車に同乗していたとき、運転を誤って十メートルほどの崖下に転落。助手席に乗っていた麻子はフロントガラス

から飛び出し、首の骨を折り即死でした」

「まあ」瑤子はあとの言葉が出なかった。

「入学早々の四月、吉野山に花見に。吉野山は麓に近いほうから下千本、中千本、上千本、さらに奥に西行庵さいぎょうあんのある奥千本と分かれています。ドライヴウェイが中千本まで通つてますので、中千本の少し上の宿舎に泊まった。ここまでは多くの運転で到着したのだが、一服したあと、妻と麻子は中千本の土産物店の集まっているところまで、車で下りて行った。急坂でしたね、妻は下から上がって来た車を避けようとしたようですが。麻子もちよつとそこまでの気分だったのでしょ、シートベルトを締めてなかった」

「可哀想」真美の泣きそうな声だった。

「ぼくが花見に行こうと誘わなければよかったです……」

「ごめんなさい」

真美の頬が濡れていた。

「気にしなくていい」本宮は真美を慰めた。

その顔を瑤子は恐縮して眺めていた。

——やはり越前岬で投身した近藤昌克と似ている。

ホテルの一階で別れ際、瑤子は、「本宮さんはお兄さんとか弟さんがおられるのでしょうか？」と訊ねた。

「いえ。どうかされました？」

「別にどうということはない。知人にどことなく似ておられますので」

*

瑤子は、真美を助手席に座らせ、ライトの明かりの拡がる路面に眼をやっていた。
「楽しかった？」

「本宮さんって能や能面に詳しいね。お父さんも本宮さんのようだった……」
真美に興奮気味の気配があった。

「お父さんは能面師、本宮さんは印刷会社の社長さん……違うところもあるわね」

「あんなお父さんがいて麻子さん、幸せだったよね。男らしいムードのなかに包容力があって……

…あー、私もあんなお父さんがいたら良かった」

「なにいあんなお父さんがなんて品のないこと言って」

「だってカッコいいじゃない」

「カッコいいじゃないなんて……」

「お母さんだって、本宮さんと話しているときの表情が活き活きしていた」

「そんなこと観察してたの。油断ならないわね」

瑤子は真美の言葉に胸の何処かどこをくすぐられた気がした。顔が火照ほてった。

「お父さんの年代のひとと話すことないもん」

ちらっと真美の顔を見た途端、どきりとした。これまでと違って、瑤子をライバル視している女の眼を感じた。

——大人びたスーツのせいだろう……。

「お母さん、お父さんのいない娘って、やっぱりこころがおかしいよね」

「こころがおかしいってどういうこと？」

普段、明るく天真爛漫に育ってきた娘と考えていただけに、真美の言葉が瑤子には意外だった。

「両親揃ってる同級生に比べてもバランスがとれていない」

「バランスが？」

「そうよ、何かが満たされていない」

「真美は小学生のときから、両親のある子らより、ずっと明るく元気だったけど。小学校でも中学校でも担任の先生がそう言っていたわ」

「お友だちの前では明るくしてたけど……」

「じゃ淋しかったの？」

「淋しいとはちよつと違う感じだけど、小学四年の頃、お父さんに抱かれたらどんな感じだろうか、思ったことある」

「そうだったの……」

真美の告白に瑤子は軽いシヨックを受けた。何不自由なく気配りして育てたつもりであったが、真美の内心にこんな淋しさがあったことに気付いていなかった。

「本宮さん、麻子さんの面影を写した観音菩薩を、お母さんに頼みに来たのでしょ？」

「そうじゃないけど、私の手にあまる仕事」

「何か考えがありそう……」

「どういうこと？」

前方に注意を向けながら、瑤子は真美を一瞥した。

真美はフロントガラスの前方に視線を向けていたが、真美の聡明な眼が据わっている気がした。近藤もよくこんな眼をしていた。

「まだわからないけど……」

——何を考えているのか……。

瑤子は胸の裡で呟き、ドライブに気持ちを集中したが、別れたばかりの本宮のことを、自分もずっと気にしていることに気付いた。